

楽しみながら習得できる  
成人男性に引き継ぎたい

広瀬魚獲り組合 組合長

しもの まさたか

下野 正孝 さん(74)

ハンギリ出しは、「広瀬魚獲り組合」に所属する52歳から80歳までの有志12人でを行っています。私がハンギリ出しを始めた約40年前は、人々が各地からやって来て、獲った魚が足りなくなるほどの盛況でした。今では見物客の数は300人ほどに減りましたが、懐かしがる人も多く、残していきたい行事です。体力があるので成人男性に限りませんが、楽しみながら漁を覚えらるる人であれば地域外からも参加できます。ぜひ、声をかけてください。



↑ 行事名の由来ともなった「半切り」。獲れた魚を入れる。

霧島市／国分広瀬潮遊池ちゅうゆうち

## ハンギリ出し

魚を獲って、その場で食べる

精進落としての伝統行事

長さ約7mの2本の竹と5枚の板に、大きな桶を取りつけただけのシンプルいかたな筏に乗り、網を投げ、時には池に潜って魚を追い込む男衆。魚のかかった網を上げながら「いおめー(魚が獲れた)」と叫ぶ声に、大勢の見物客から拍手が沸き起こります。

これは、毎年盆明けの8月16日に、霧島市の広瀬地区にある潮遊池で行われる「ハンギリ出し」という精進落しんじんらくとしての伝統行事です。名の由来は、獲れた魚を「半切り」という底の浅い馬の飼料桶に入れることから。見物客は、漁で獲れたエツナ(ぼらの子)などの魚を買ってその場でさばき、自前の酔みそで食べるのが習い事です。

潮遊池周辺は、かつては遠浅の砂浜で、江戸末期、弘化2(1845)年の干拓によって水田になった場所。海沿いには、潮だまりがいくつも作られ、エツナを始めとする格好の漁場となりました。この潮だまりを管理する水守に、島津藩が給料の代わりに漁業権を与えたことが、行事の起源といわれています。

鹿児島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から「ハンギリ出し」をご紹介します。

「昔は旧暦の8月16日、9月1日、9月15日の3日間だけ行うのが決まりでした。干満の差が大きい大潮の、この時期に魚を獲りやすかったからですが、いつしか新暦の8月16日に行われるようになり、精進落としての行事になったようです」と語る「広瀬魚獲り組合」組合長の下野正孝さんは、ハンギリ出しの名人。しかし、漁は見ただ目以上に難しく、30代の頃から難儀をしながら練習し、技術を習得したそうです。なぜ、そこまでがんばったのかの問いに、「漁の後の飲み会が楽しいからです」とおっしゃっていました。

伝統の技と心は、楽しみがあつてこそ、守り継がれていくもののようにです。



霧島市

### 霧島市

霧島市は、平成17年に国分市、溝辺町、横川町、牧園町、霧島町、単人町、福山町が合併して発足した総人口128,120人(平成25年5月1日現在)のまちです。鹿児島県土のほぼ中央に位置し、桜島、霧島山、錦江湾を望むことができます。写真は霧島市霧島田口にある「高千穂河原」。高千穂峰のふもと、標高790mにあり、ピジターセンターでは霧島の自然や文化について学ぶことができます。